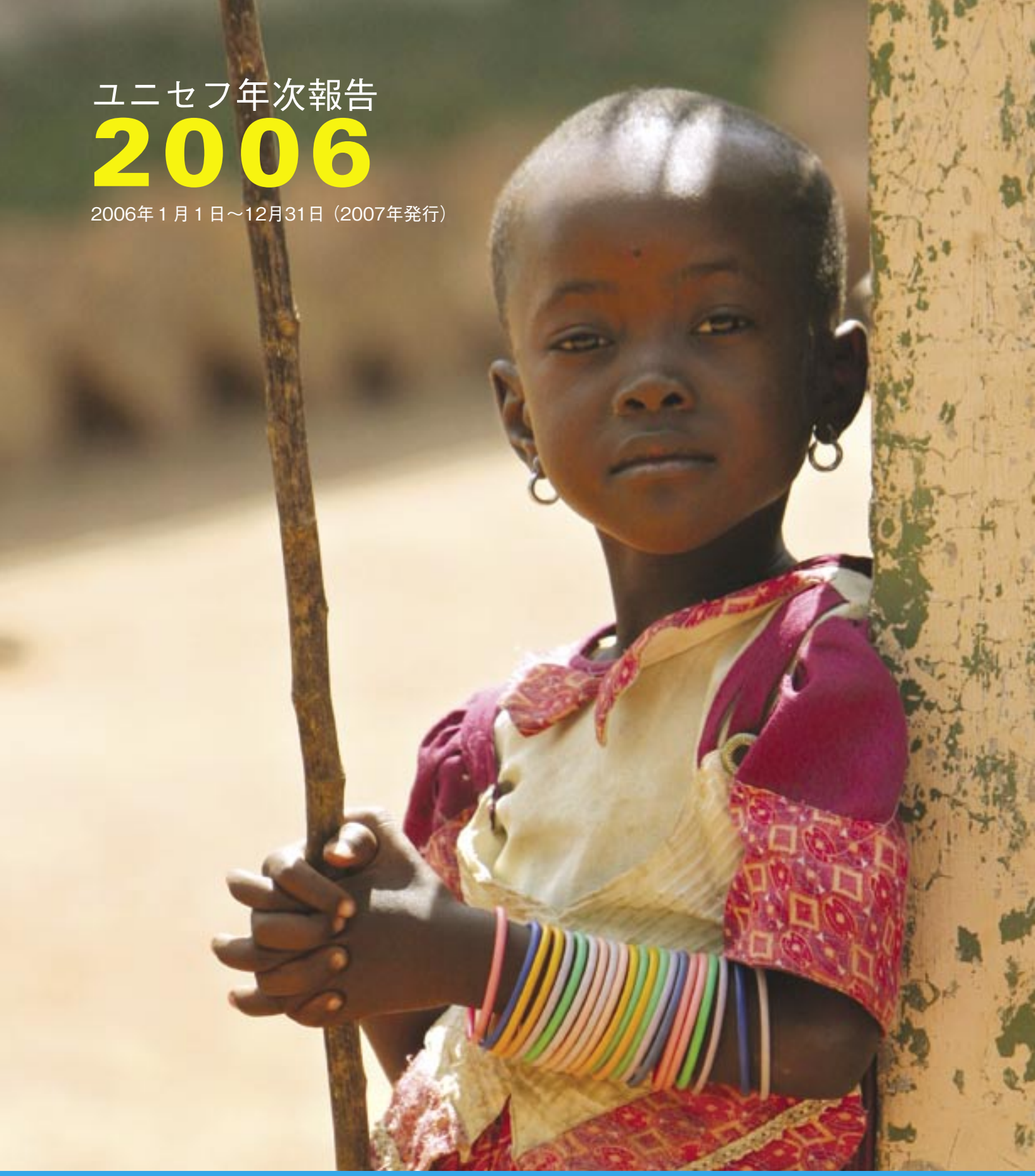
ユニセフ年次報告
2006

2006年１月１日～12月31日（2007年発行）



1946 - 2006
UNITE FOR CHILDREN

unicef

本書に掲載されている情報の出典について：本書に掲載されているデータは、ユニセフ（国連児童基金）、そのほかの国連機関、ユニセフの各国事務所が提出している年次報告、ならびに2007年６月に開催されたユニセフ執行理事会に提出されたユニセフ事務局長の年次報告に基づく。

本書に記載されている資金額について：断り書きがない限り、すべての額は米国ドルである。

ユニセフ年次報告　2006

（2006年１月１日～2006年12月31日）

目次

はじめに 1

子どもとミレニアム開発目標 2

多くの道筋、ひとつの目的地 10

パートナーシップの力 20

運営と資源管理 30

パネル

ザ・ボディショップ：　沈黙を破る 5

IKEA（イケア）：　女性をエンパワーし、子どもの生活を変える 19

FTSE4Goodに加わる企業 29

はじめに

2006年に、ユニセフはスペインのアストゥリアス公賞[1]を受賞した。これはスペインでもっとも栄誉ある賞のひとつで、ユニセフが子どものために行っている人道的な活動に対して贈られたものである。ユニセフが創設60周年を迎えたこの年に、この栄誉に浴したことを特に名誉に思う。

ユニセフは、この60年の間に、緊急事態に対応する機関から、緊急事態の如何を問わず子どものために活動する代表的な機関へと生まれ変わった。今日、ユニセフは、きちんと成果を出すことに重きを置きながら、子どもの権利を守るために活動している。

本書『ユニセフ年次報告2006』が詳細に示すように、ユニセフは、その包括的な支援プログラム、強力なパートナーシップ、確固たるリーダーシップを通して、以前にも増してアカウンタビリティ（説明責任）を果たし、データに基づいた活動を行い、きちんとした結果を出すべく活動している。

本書の報告期間（１年）の間に、我々はサハラ以南のアフリカのユニセフ事務所代表全員を集め、特に保健面での成果に関わる支援プログラムを評価し、望ましい成果が得られたプロジェクトをより規模を拡大して実施するためにはどのような戦略を図ったらよいのか、特にコミュニティを中心にした包括的な支援を中心に置いて検討した。

ユニセフは、国レベルのデータ収集に引き続き力を入れているが、2006年からは、それまで５年ごとに行われていた複数指標クラスター調査（MICS）を、３年ごとに行うことにした。統計やその統計を裏付ける資料は、人口保健調査（DHS）やDevInfoソフトウェアをもとに作成されており、被支援国がミレニアム開発目標達成に向けた進捗状況をモニターするのに役立っている。

子どものために成果を出す。そのために、ユニセフはパートナーシップを拡大し、強化した。世界的な連携を図ることで、子どもと母親に、生命維持に必要な栄養と基礎保健ケアを提供することができる。スポーツ界のクラブやリーグは、教育の促進のため、あるいはエイズと闘うために、ユニセフと手を結んでくれた。ユニセフ国内委員会や親善大使は、世界の注目を子どもたちに向けるよう力を貸してくれた。

2006年を振り返るこの年次報告は、世界の子どもたちのために達成された数々の成果を明らかにするものである。皆が緊急性を感じれば、ミレニアム開発目標を達成するために、大きな前進を続けることが可能なのである。

アン・M・ベネマン
ユニセフ事務局長

[1]〈訳注〉アストゥリアス公財団が、1981年からさまざまな分野で目覚ましい成果を挙げた人物・団体に授与している。